

# 静岡大学ピアノとウェルビーイング研究所

## 創立1年を迎えて

静岡大学ピアノとウェルビーイング研究所・所長 安永 愛

### ピアノに関する学際的・産学連携研究を目指して

2023年4月1日、ピアノに関する学際的研究・産学連携研究を目指す静岡大学ピアノとウェルビーイング研究所が発足した。静岡大学では2021年度に、複数学部の教員、学外教員参加を成立要件とする「プロジェクト研究所」の制度が発足し、2023年3月現在、「発酵とサステナブルな地域社会研究所」「多文化共生研究所」「就労と人口動態研究所」など、様々なテーマにわたる32のプロジェクト研究所が活動中である。「ピアノとウェルビーイング研究所」もその一つである。プロジェクト研究所は教員の自発的なアイデアにより出発し、設置期間は3年。活動状況が良好であれば、期間更新が認められている。

ピアノとウェルビーイング研究所のアイデアは、ほんの些細なことをきっかけにしている。本研究所有所長である安永は、フランス文学研究をバックボーンとして、「発酵とサステナブルな地域社会研究所」の一員として2021年末頃からプロジェクトに取り組み、専門分野を超えた知の追求や、地域の人々との連携に手応えを覚えていた。「発酵とサステナブルな地域社会研究所」の核となっているのは「お酒」とりわけ「ビール」であったのだが、ふと、幼少時より愛してやまない「ピアノ」を学際研究・地域連携研究のターゲットとしてはどうか、という思いが過ぎった。折りしも夫がウィーン単身赴任となり、2022年11月、ウィーンのアパートに置くピアノを選定する機会が訪れた。ヤマハのピアノで高校時代までを過ごし、スタインウェイやベーゼンドルファーに日本のピアノは敵わないと決めつけて過ごしてきた私は、ウィーンの数々のピアノサロンでヤマハやカワイのピアノが欧州の老舗ブランドピアノに決して引けを取らないクオリティ、存在感を示していることに、目を開かれる思いがした。そして、自らが籍を置く大学が所在する静岡県が日本のピアノ産業のほぼ100パーセントを担っている事実思い至り、静岡のピアノ産業への心からの賛嘆の念が湧いてきたのである。

ウィーンからの帰国後間もなく11月末には、ピアノと朗読のコンサートのお手伝いでご縁の生じていた本学教育学部所属のピアニストである後藤友香理教員、そして後藤教員にSTEAM教育の件でコンタクトを取られていた本学工学部（当時）の下村勝教員に、ピアノに関するプロジェクト研究所の構想をお伝えし、すぐさまお二人から前向きな返事をいただいた。「ピアノ研究所」という命名ではイメージの広がり欠け、また音楽大学ではなく総合大学に設置されるメリットを活かせないとして、思いついたのが「ピアノとウェルビーイング研究所」という名称である。ピアノとウェルビーイングとを掛け合わせることによって、芸術のみならず、工学的・生理学的・医学的・心理学的・歴史学的・社会科学的な探究課題に結びつくのではないかと考えられたのである。

2023年の正月明けにプロジェクト研究所の申請応募が始まった。申請締め切りは1月25日とのこと。この申請応募タイミングだと心の準備はなく、プロジェクト申請応募は諦めかけたのだが、家族の叱咤激励もあり締め切り1週間前になって一念発起。まずは、学外メンバーとして、東京大学大学院

工学研究科で環境音響学を専門にされている佐久間哲哉教授に白羽の矢を立てた。大学のピアノサークル（東大ピアノの会）の後輩に当たるが、久しぶりの連絡にも関わらず、快諾を得ることができた。これにより設立要件の最低限のメンバーは集まった。さらに文学・経済学・心理学・工学・医学と多岐にわたる専攻の方々に、紹介された方も含めて研究所の趣旨を伝えたところ、あれよあれよという間に学内外から 20 名のメンバーが集まった。音楽を専門とされる教員が複数参画くださったのはありがたかったが、一見、ピアノとは関係なさそうに思われる分野の方々も、ピアノのテーマに魅力を感じてほとんど二つ返事で OK してくださったのである。

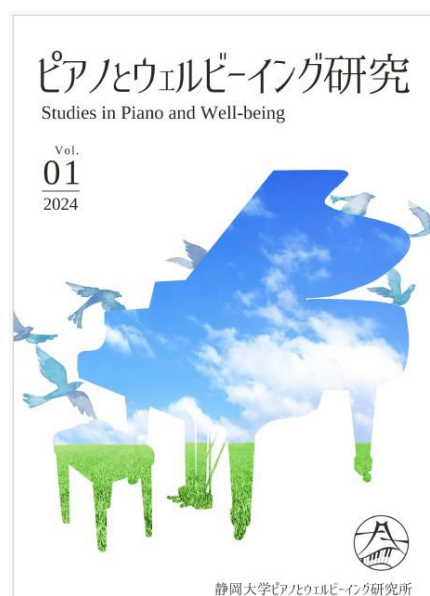
申請書を提出したからといって、無条件で研究所設置が許可されるわけではない。2 月に入るとヤマハ株式会社の幹部の方や、静岡大学同窓会の方と研究所の在り方について意見交換を行ったり、以前、マスタークラスで面識を得た日仏ピアニスト夫妻（フランソワ・アンリ氏と石橋真由子氏）と ZOOM ミーティングを行うなどして、3 月初めの設置申請審査のヒアリングに備えた。3 月半ばに大学より無事許可の通知があり、4 月 1 日正式発足となった。

## 研究所初年度の試み

2023 年 4 月、20 名で発足したピアノとウェルビーイング研究所には、さらにメンバーが増え、2024 年 3 月現在メンバーは 24 名である。創設時点で研究所としての特段の資金はなく、研究所とはいっても、所在地は所長の個人研究室であり、新たなスペースが与えられたわけではない。2023 年末、2024 年の 1 年間、ロームミュージックファンデーションの助成が得られることが決定し、ようやく研究所としての弾みがついてきたところである。音楽を専門としているメンバー以外は、ピアノのテーマは初めてのメンバーも多く、在籍する研究所メンバー全員がこの 1 年間で具体的な成果を出せたわけではない。とはいえ研究所の紀要『ピアノとウェルビーイング研究』をこの度創刊することができた。拙い歩みではあるが、初年度の研究所の取り組みをご紹介します。

まず 4 月の研究所キックオフミーティングでは、およそ以下が確認された。①それぞれのメンバーがそれぞれの専門領域からピアノに関する研究を行い、必ず 3 年以内に成果（論文形式もの）を 1 本は出すこと。②研究所として、静岡・浜松地区でそれぞれ年に 1 回は、市民を対象としたレクチャー・コンサートを開催すること。③地元（特に浜松地区）のピアノ関連業界との連携を取ること。④研究所ホームページを開設し、研究所の成果をアクセス可能なものとする。⑤各自、ピアノ研究に関わる研究費の獲得に努力すること。以上の方針に沿って、概ね進行していると言える。

所長である安永は、研究所の活動の第一歩として「ピアノとわたし」と題した個人インタビューを始めた。プロ・アマチュア問わず、それぞれの方にピアノと関わりについて 1 時間程度語っていただき、それを記事にまとめていくというものである。初年度に、22 件のインタビューが研究所ホームページ（2023 年 7 月開設 <https://institute-of-piano-and-well-being.jp>）にアップされている。インタビューは誠に素朴な方法であるが、個々の方々のピアノを通じたウェルビーイングが浮かび上がってくる。その方の人生の深い思いや願いに必ず触れることになる。こうしたインタビューの学問的な分類や位置付け



▲研究所紀要創刊号表紙  
デザインは地域美術団体  
「アトリエ茶葉」の松野佑哉氏



### ▲研究所のホームページ

みて浮かび上がってくることもあるのではないかと考えている。

もう一つ力を入れたのは、静岡のピアノ産業へのフィールドワークである。研究所の最初のイベントとして、ヤマハインベリションロードの見学を行った。ヤマハ株式会社からは、貴重な同社アーカイブの利用もご提案いただいている。ことに1938年の国民総動員法公布から1950年頃までの戦後の復興期にかけての楽器製造業の経営戦略を注視したい。楽器ではなく戦闘機を作りを強制された時代もあったこと、そうした時代を乗り越えて、現在のヤマハも河合もあることは、戦争の足音が決して遠くはないと感じられるこの時代において、重要な認識ではないかと考えている。

11月には、大学祭のイベントにピアノとウェルビーイング研究所として出展した。静岡キャンパスでは11月4日、安永による研究所の紹介に続き、高久新吾教授（美作大学）による「フォルテ・ピアノとモダン・ピアノーベーターヴェン「ハンマグラヴィーア」第3楽章の奏法をめぐって」、西村友樹雄氏による「アンドレ・ジッドとピアノ」、原瑠璃彦講師（静岡大学、4月より准教授）による「坂本龍一のピアノと庭—能楽コラボレーション《LIFE - WELL》を出発点に」の講演が行なわれた。続いて研究所メンバーのピアニスト、後藤友香理准教授（静岡大学）、竹内彩佳氏（美作大学）、服部慶子講師（静岡大学）のピアノ演奏が披露された。尚、偶然ではあるが、講演された西村友樹雄氏は日本フランス語フランス文学会奨励賞を、原瑠璃彦氏は文化庁芸術選奨文部科学大臣新人賞を受賞されることとなった。高久新吾教授も2023年度に着任された美作大学で目覚ましい活躍をなさっている。研究者として脂に乗っている面々に本研究所のシンポジウムにて発表していただけたことは誠に心強い。

浜松キャンパスでは、11月12日に、いずれもフィールドワークによって面識を得た河合楽器製作所の事業部 Shigeru Kawai ピアノ研究所主監の三浦広彦氏、冨田ピアノの代表取締役冨田健氏、今出川ハンマー製作所の代表取締役今出川寛氏、そして静岡大学ピアノ・サークル代表の和田善尚氏にパネラーとして登壇いただき、ピアノ産業と今後の展望について語っていただいた。偶然にも三浦・冨田・今出川の御三方はいずれも還暦世代で、ピアノの国内需要のピークであった1980年より後の、「斜陽」の時

についてはインタビューを実践している私自身よくわからないが、どのようなインタビューにも発見があり、その方の人生の独自の輝きや色合いを見る思いがする。インタビューに答えて下さる方も、語ることによって、自分のピアノ人生を振り返るきっかけを得られることが多いように見受けられる。まずは、この「ピアノとわたし」のインタビューを50件までは続けていきたい。ある程度の数を集めて



▲研究所設立記念シンポジウム(2023年11月11日、静岡大学佐鳴会館)

代の中でピアノ産業に携わってこられたわけであるが、お話からは芸術性豊かなピアノに関わってこられたことの自信と喜びがひしひしと伝わってきた。また、若い世代の和田さんからのピアノ産業へのエールもあり、心温まるシンポジウムとなった。この模様は、静大テレビジョンが収録し、YouTubeで視聴可能となっている。(https://sutv.shizuoka.ac.jp/video/389/3080)当日は、講演会に続け、前述の後藤先生、竹内先生、それにもう一人の研究所メンバーである斎藤絵里子先生(浜松学院大学)の演奏動画も披露された。

2024年3月8日は、本研究所、今年度の最大のイベントである、パトリア・パニー レクチャーコンサート「絵画の音楽・音楽の色彩—ジョルジュ・ミゴ(1891-1976)を通じて」を開催した。ベルン芸



▲パトリア・パニー レクチャーコンサート  
(2023年3月8日 かじまちヤマハホール)

術大学教授でピアニストであるパトリア・パニー氏は、静岡市で過去に3回の演奏会を開催し、好評を博してこられた。今回は、浜松での出演となり、ヤマハミュージックジャパンより、ホールレンタル料およびピアノ調律の無料提供に与った。パニー教授は、音楽と諸芸術との関係についてレクチャーしたのち、画家にして作曲家であったフランス人ジョルジュ・ミゴ(1891-1976)の絵画作品を舞台に映写しつつ、ミゴの曲を中心に、ドビュッシーやショパンなどフランス近代のピアノ曲を演奏された。瞑想的で色彩感あふれるパニー教授の演奏を、アンティームなホールで聴くのは、本当に贅沢な経験であった。レクチャー・コンサート開催にあたっては、静

岡大学名誉教授の今野喜和人氏が司会・通訳を務め、静岡大学ピアノ・サークルと浜松医科大ピアノ同好会のメンバーが広報や会場整理に協力してくれた。学生たちは、パニー教授と言葉を交わし、一緒に記念撮影していた。

## 今後に向けて

静岡大学ピアノとウェルビーイング研究所発足1年で、想像を超えて進んだ部分もあれば、思ったほど進まなかった部分もある。しかし、確実に言えることは、研究所を発足させたことによって、多くの出会いが生まれ、それがメンバーの活力になってきているということである。一つの出会いが次の出会い、それも複数の出会いに繋がり、ネットワークが紡がれていく。フランス文学研究者である私は、研究とは極めて個人的な営為だと考えてきたが、こうした人のつながりによって生まれるインスピレーションも非常に大切であると考えてに至った。また、ピアノとウェルビーイング研究で得た知見を教育に還元することも視野に入ってきた。静岡大学には「学際科目」という必修の科目区分があり、オムニバス形式で一つのテーマを15講展開することになっている。「発酵とサステナブルな地域社会研究所」のメンバーで、すでに「発酵とサステナブルな地域社会」の「学際科目」が開講され、多くの受講生を集めているが、「ピアノとウェルビーイング」をテーマにしたオムニバス講義も、近年中に開講可能になるのではないかと考えている。開講かなった暁には、本国でも必要性が叫ばれて久しいSTEAM教育の実践になるとの確信を持っている。

微力ながら、静岡大学ピアノとウェルビーイング研究所の実践が、音楽文化創造に繋がっていくならば、これほど嬉しいことはない。